一筆啓上
作左通信
第五十七号　平成二十四年十月七日（日）発行

本多作左衛門はどんな人（その一）

本多作左衛門は『一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ』の最も短い手紙文の作者として有名です。お仙」とは作左衛門が晩年に授かった、一人息子の仙千代」のことです。この手紙は、家康と織田信長の連合軍が信玄の長男の「武田勝頼」と新城北東の長篠で戦った時家康に従って戦場に赴いた作左衛門が、長篠から自宅〔岡崎〕の妻に書き送ったものです。手紙は優れた文章として、江戸時代の書物に持てはやされ、また大正、昭和初期の「小学国語読本」の教材として、小学五、六年で学習したものです。

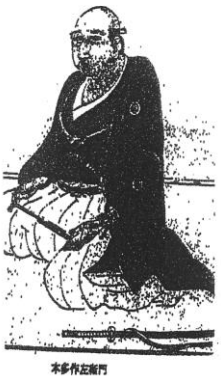
◎作左は、岡崎三奉行の一人

本多作左衛門は徳川家康に仕え、家康の支配地の行政を行う。三人の奉行の一人として腕を振るいました。元より武将ですから、戦いでも起これば、家康配下の一人として、部下を引き連れ戦場に赴きます。しかし平時は奉行として、代官を配下にお触れの通達や、年貢の取り立て、貯蔵、住民の訴えを聞くなどの政務をお行いました。奉行職は、三人で担当しました。当時の世評で仏高力（慈悲深い高力清長）〔幸田の高力在住〕鬼作左（物事に妥協しない厳しい本多作左衛門）どちへんなしの天野康景（どっちでもない、依怙贔屓しない公正な天野康景）とはやされました。そして、三人合わせて公正で、慈悲深く、厳しい、行政が行われたと言われます。

◎作左衛門は宮地で生まれました。

本多作左衛門は戦国たけなわの一五二九年、母が犬頭神社の宮司の娘であったようで、犬頭神社の舎宅で生まれました。犬頭神社には明治三十八年四月に建てられた「作左衛門生誕の石碑」があります。

（横山　茂）


本多作左衛門

鬼作左が行く（絵・山本健治）